

あゆみ

『クリスマスに思う』

理事長 森 公夫

十一月の休日に、広島で中四国の児童発達支援施設の園長さんたちの旧交を温める会があり、地元の園長さんから声をかけていただいたので、僅か一年



半の園長生活の私も参加させていただきました。

会の始まりまで少し時間があつたので久しぶりに平和公園に行き、連休ということで、訪れている人の多さと外国の人たちの数に驚きました。

原爆ドームのあたりは特に人が多く、ドームをバックに写真を撮る人で通り抜けるのもたいへんでした。私が小学校の頃、このドームの風化と崩壊を

くい止めるための募金の話があつた記憶があります。そつした努力のおかげで、被爆以来八十年近く経つた今も、補強や補修をされながらここに残っているといふことは、日本人に、今が平和で幸せな時

代なのだあらためて教えてくれる存在です。むき出しになった鉄筋や崩れ落ちたレンガ、それらを背景に、スマホを持ち上げ、笑顔で自撮りできるとい

うことが、私たちが今、平和を享受できていることの証だからです。しかし、悲しいことに戦争は過去の遺物や歴史上の出来事ではありません。この地球

上から戦禍が絶えたことは一度もないからです。ニユースで世界の紛争地域の映像を見れば、今も

同じように、崩壊した建物や傷ついて路頭に迷う悲惨な人々の姿が目飛び込んでくるはずで

す。戦争は、平時に考えられないような新しいルールを生み出します。そこで重要視されるのは、戦争遂行に役に立つか立たないかという基準です。人をたくさん殺した人がヒーローになる戦争に人道も正義もありません。崩れた建物も泣き叫ぶ人たちの姿

も、為政者にとってはただの景色でしかないのです。

私たちは今、福祉とよばれる場所に生活の基盤をもつて生きていますが、福祉は社会が平和であればこそ存在しうる場所だと思ひます。戦時に弱者が無視され弱いものが辛い立場に追いやられるのは、歴史を遡ればだれにでもわかります。だからこそ、私たちは世界中の平和を切望します。

私がよく思ひだす「十戒」という古い映画のワンシーンがあります。奴隷だつたイスラエルの民が、安住の地を求めエジプトを脱出し砂漠を彷徨つていたとき、リーダーのモーセが神の声を聞くためシナイ山に登っている間に、金の子牛の偶像を造りそれを掲げて拝み始めるというところ

です。その時の民衆の理性を失つた狂乱シーンと、今の時代がどうしても重なるて見えてしまつからです。

人はあまりにも奢りすぎました。便利で快適な生活を望むに止まらず、それ以上のものを欲しがるようになってしまいました。バザーをすると出てくる、使われない家具や食器、食べられないままの食料品。欲しい欲しいで集めたものは、やがてゴミの山になつて地球を窒息させようとしています。

5足ある靴を2足にへらすこと、肥満解消でジムに通うよりも肥満にならない生活で満足すること。それで戦争を起こさずにすむなら、それで十分ではないでしょうか。クリスマスとは、そついうことを静かに考える、大切な時間のように思ひます。

『禿頭の謙虚な光に』

松山教会

牧師 上島 一高

先日、『天上の友 第五輯』の担当原稿を提出した。『天上の友』は、松山教会のルーツである同志社、その神学部卒物故者を中心に載せて来た本だ。第四輯までは卒業後、教会やキリスト教主義学校で働いた人々だけを掲載して来たが、今回より、社会福祉などキリスト教に基づく社会事業に携わった人々も載せようと衆議一決した。

その時、皆の頭に最初に浮かんだのは、前回のこの紙面でも紹介した止揚学園の福井達雨園長だった。知的障壁児・者こそ光であることを見出し、延いては、私たち皆が、神の光のもとに生かされていることを教えてくれた先輩で、二年余り前、惜しまれながら天に召された。父上が園生と共に創り出した園で育った生(いくる)さんが、その意思を継いだ。

達雨先生と、直接のつながりがない私だが、先生は、私が以前勤めた新潟教会とのつながりで、一度だけ出会わせていただいた。といっても、ある日曜、講壇から礼拝説教をしている時、小柄な体躯の禿頭(とくとう)が目に留まったのだ。加齢で一回り小さくなった私の前任者かと思ったが、違う。紹介カードが渡されて、「ああ! この方が」と知る。

私たちにとっては伝説の人。しかし、オーラを放たず、ただただ、神の前に低くある姿であった。その時、止揚学園に対して献金をした際に戴いていた御礼状の書面の筆遣いを想い起した。一文字一文字に心込めた、それでいて作り込んだのではないペン字。何百枚のどの一枚にも手抜きのないその形(なり)は、先生の姿であり、学園の姿であった。前回の紙面にこう書いた。「あゆみ学園と止揚学園はほぼ同年齢、地域も違い、事情も異なるが、その足取りを尋ねると、共感し合えるところが大きい。コロナ前、四国に現・福井 生園長をお呼びして話を伺おうと計画しながら断念した。新しい年に、ぜひ、実現したい。」その後、止揚学園と連絡を取り、これが実現する。二〇二五年二月一六・一七日だ。

一六日(日)には味酒町の松山教会の特別礼拝で、福井生園長が講演。あゆみ学園の関係者・支援者には、ぜひご来会の上、現場の熱気伝わる言葉を聞いていただきたい。一七日(月)には、あゆみ学園に来訪・見学予定、交流を深められればと願っている。森 公夫理事長は、さっそく講演者の著書を読まれると共に、職員にも勧めてくださっている。

止揚学園は自園を「知能に重い障がいのある仲間たちの家」とする。そして、福井 生園長は自己紹介にこう書く。「一九六六年滋賀県にある止

揚学園に生まれる。生まれた時から知能に重い障がいがある子どもたちと共に育つ」そんな「仲間たちから『優しい心』について教えられながら、生命と真剣に向き合う日々」を過ごしていると。

あゆみ学園も「すべての人々の人格が認められる」ために心砕く。そこにこそ本物の光があるからだ。



『自己流っていいかも』

あゆみ学園

管理者 武智 一郎

今こうして原稿を書きながら、ふと振り返ると令和6年度も三分の二が過ぎてしまいました。ついこの間本園に新しい仲間を迎えたばかりなのに、本当に時間は早く流れていきます。特にこの夏はひどい暑さで、毎日熱中症の心配をしながら、水遊びを恋しがる日々が長く続きました。そして今、急に来たような冬の風に震えています。この8か月を特に短く感じるのは、この特別な気象のせいだったのでしょうか。さて、今年の子どもたちを見ると、独自のルーティンを持っている子どもが例年よりは目立つように思います。靴を履くときに決して先生の手出しを許さず、自分流を貫く子、送迎車を降りるときに必ず自分のマニュアル通りに降りないと気が済まない子、靴脱ぎ場で必ず自分だけのひと時を楽しむ(?)子など、例年以上に個性豊かな面々がそろっているようです。



こうした子どもは集団行動や時間で区切られた行動をとるときには、たいてい『もういいでしょ』『早くしなさい』という言葉掛けの対象になってしまいます。でも私だって自分自身を振り返ってみると、一日のいろんなところでばんやりしたり、関係のない考え事をしたり、効率の悪い自己流を押し通したりしている気がします。きつと若い頃の私を部下に持った先輩は『おい、早くしろよ』という立っていたかも知れません。

そんなことを考えると、色々と個性の際立つ、自己流ファーストの子供を目の前にして、私も偉そうにはできません。『十人十色、まあいいかな。にこにこしていましょ』と心に言い聞かせて、毎日を過ごしています。



『「壁」を超える』

多機能型事業所あゆみ

管理者 渡部 剛

最近世間を賑わしている「壁」の話、曰く「年収103万円の壁」「106万円の壁」「親や夫の手取りが減る」「あと何万?」「社会保険が壁・・・」「与党が壁・・・」等々話題は広がって際限がないように見えます。

でもちょっと待って下さい。子のバイトや妻のパート収入を103万円までに抑えないと父や夫の税金が上がって手取りが減ると言っても、それは扶養控除という税制のなせるワザ、税率が10%の場合大学生一人で6万円程度で、子や妻の収入増がそれを上回れば世帯全体の収入は増えるのだから、減額分を妻や子から小遣いとして「徴収」すれば税制の「歪み」を家庭内で解消しつつ家計全体は潤うし(苦笑、妻(共働き時代だから「配偶者」というべき)については、配偶者控除は外れても同額の「配偶者特別控除」が適用されて、150万円までは配偶者の手取りは減らないばかりか、仮に150万円を超えても配偶者特別控除は(漸減しつつも)一応201、6万円までは認められています。

外にも「扶養手当の壁」とか、あちこちに「壁」が立ちほだかり、数えれば6種の壁が我々を取り囲んでいるという。それは、税だけでなく雇用や給与制度或いは社会保障等に由来するもので、個別の事情で異なるかもしれない。最も広範な問題を孕んでいるのは「106万円の壁」、「130万円の壁」所謂社会保険制度がもたらす壁であろう。厳密に言

えは壁というより「溝」といふべきか。そもそも3号被保険者つまり典型的に言えば専業主婦は、当初独自の年金権がなく、夫の厚生年金が夫婦二人分支給されるという建前でした。

だから離婚したら自分名義の年金分与はなく、障害者になっても障害年金はなかった。逆に保険料を払わずに基礎年金がもらえると羨まれたりもした。後に2号被保険者（配偶者）が保険料を二人分支払っているのだと説明されるが、要するに自分で保険料を支払って自分名義の年金を受給するという近代的年金概念でなく、あたかも「家庭を守った」恩恵として恩給のように扱われていた。

しかし、夫婦共働きをするようになり、夫々が所得を得て、夫々が資産を形成する時代となると恩恵が束縛になる。106万円を超えると3号被保険者は2号被保険者となり、働く事業所が社会保険適用事業所でなければ130万円の壁により1号被保険者になる。

観点を変えると、これらの問題は正規労働者や高給取りには縁のない話で、非正規労働者（その大部分が女性である）或いは低所得者だけが選択を迫られるのであり、たとい選択はできたとしても、それで制度の溝を越えて即皆が富裕になれる訳でもない。

なぜかとも非正規が正規を超えるほど増えたのか、その要因は一つではない。共働きが増えたのも一因ではあるが、裏を返せば共働きしないをやっていけなくなったとも言える。

バブル後の「失われた30年」の間何が失われたのか。バブルで生じた国内の累積債務、つまり借金は将来の生産物、付加価値の先取りであり、後世返済せねばな

らない。30年間、国内ではリストラに励み、賃金の安い海外へ工場を建て、海外の安い労働市場に間接的に結合した国内賃金は伸びないどころか、より安い第2、第3の労働市場、つまり派遣、契約、パート等の非正規雇用者を増やし続けた。その殆どが女性であった。その一方で内部留保は2倍、3倍に増え続けている。敢えて言えば、衰微する日本と日本経済を支えてきたのは女性の働きがあつてこそであり、何とか借金を清算して新たな日本の発展を目指すなら、その場凌ぎ的に肥大化し錯綜した壁を一扫して、真正面に働く目標が見えるような道を開かないと、壁が溝になり、分断化した閉塞社会に墮してしまつと危惧します。



『安心基地であるために』

児童発達支援センター あゆみ学園

保育士 仙波 梓

今年度も半期が終わりました。子どもたちはいつも元氣にかわいい笑顔を見せてくれています。

子どもたちと遊びながらいつも思うのは、いかに楽しんで活動に参加できるかということです。当然ですが、一人ひとり楽しいと思うことは様々で、嫌だと感じることも違います。子どもたち一人ひとりが楽しめるようにするためには、その子の好きなものは何なのか、どこまで分かっているのか、どう伝えたら分かるのか、それを知っておく必要があります。子どもたちが楽しめるように様々な工夫をして、笑顔を見せてくれたときには職員みんなで大喜びしています。

日々の生活やあそび、行事等、自発的に参加できるようにするには安心できる環境が必要ですが、そこには安心できる人も含まれます。安心できる人と安心できる場所で生活することで、できることが増えていきます。私たち職員が子どもたちの安心できる場所になっているだろうか…といつも考えています。何かあったときにすぐに助けてくれる、分かってくれる大人がいることで、少し難しいことにもチャレンジできるのだと思います。少し難しいことへのチャレンジが更なる子どもたちの成長を見せてくれています。これからまたくさんの笑顔と成長が見られるように私たちが安心基地になっていきたいです。

そして、子どもたちを預けてくれている保護者の方にとっても安心できる場所、人でありたいと思っています。子どものかわいいところ、嬉しかったこと、困ったこと等々、なんでもお話してくださいね。みんなの安心基地になれるように職員一同、頑張っていきます!!

『私の特権』

児童発達支援センターあゆみ学園

保育士 金井 亜希子

十一月に入っても暑い日が続き、秋は一瞬で過ぎ去りました。日本の四季はどこへやら・・・

早いもので、もう今年も終わりを迎えようとしています。そんな中でもあゆみ学園の子ども達は、遊びに遊びに元氣いっぱい・力いっぱい全力です！

私は現在、フリーの立場として各クラスの子ども達と関わらせていただいています。年齢も違えば育ちも成長も違う。また、あゆみ学園で子ども達と過ごせるのは僅か五時間程。そのような中で、子ども一人一人の「できた！」「やった！」の数々の瞬間に立ち会えることに大きな喜びを感じています。しかし、フリーと言っても、状況や発達にに応じた臨機応変な関わり方・周りを見る力など様々な対応能力が必要とされます。これは私自身の成長にも大きな糧となっており、日々成長させてもらっています。

あゆみ学園に通う全ての子ども達と関わることで、成長を身近に感じることができる。これはフリーでしか味わえない醍醐味だと感じています。

今日はどのクラスの子ども達と関われるのかな、とワクワクしながら通勤時間中を考えることが、毎朝の私の日課となっています。

『マスク生活からの解放』

児童発達支援事業どんぐり

児童発達支援管理責任者 黒川 真紀

どんぐりは、毎日日替わりで一歳児から五歳児まで約四〇人の子ども達に通って来てくれています。



一、二歳児の子どもたちは、初めてお母さんと離れて集団生活を始めるのですが、初めはお母さんと離れたり、園に着いた途端に泣き出したりして、ご飯も食べずに帰るお子さんもいます。でも、回数を重ねるごとに好きな遊びを見つめたり、体操をして絵本を見て遊びが始まるといったいつもの流れを覚えて安心して生活できるようになったりして少しずつ笑顔が出てきます。また、お母さんがいなくても一人でご飯を食べたりオシッコに行ったりして自分で出来ることも増えてきます。そして、いつか自分からお母さんに手を振って笑顔で別れることができるようになります。「たくましくなったな」「どんぐりを好きになったかな」と思い、とても嬉しくなります。

三歳児から五歳児の子ども達は幼稚園や保育園を併用しながら週一回通ってきてくれています。少人数で整った環境の中で、活動に意欲的に参加したり、自分をアピールできたり、先生に助けてもらいながら苦手な事にもチャレンジしたりして頑張っています。頑張った事が成功すると、満面の笑みを返してくれたり、恥ずかしそうに笑ったりして、皆反応はそれぞれです。私達職員は、子どもの反応を

見て、認めたり褒めたりしながら子ども達が自信を持てるように関わっています。

さて、昨年の5月にコロナが5類に移行してから、徐々にマスク生活から解放されてほぼ以前の暮らしが戻ってきました。マスク生活の間は、私自身子ども達に表情を見せることがなくなり、子ども達は私の言っていることが分かったかな？伝わったかな？と不安になったり、マスクをしている子ども達の表情も分からず、楽しんでいるかな？困っていないかな？等心配になったりすることも多かったです。マスクをすることでお互いの表情が見えず、気持ちが伝わらなったり、相手の気持ちも分からず不安になったりしてコミュニケーションが取りにくくなっていました。コロナ禍の約3年間は、子ども達は大人の表情を見ることが減り、コミュニケーション不足になり、子ども達にとってはかなりの弊害だったと思います。相手の表情を見ることは、社会性やコミュニケーション能力を育むために重要な役割を果たします。特に幼児期の子どもは、表情を見ながら言葉を理解したり、感情を読み取ったりすることで他者との関係性を学んでいきます。表情が見えない事で、感情の理解が難しくなったり、表情の模倣が減ったり、言葉の理解が遅れる可能性もあります。また、社会性の面でもコミュニケーションのズレや人との関係が築きにくくなる恐れもあります。

マスク生活から解放された今、3年間を取り戻すつもりで、子ども達と互いに表情を見てコミュニケーションを取りながら生活しています。子ども達にとって言葉や感情等を覚える大事な時期に、表情を通して子ども達に伝わるものがたくさんあり、とても重要なことだと実感しています。これから子ども達と向き合いながら、たくさん遊んで笑ったり、ドキドキしたり、泣いたり…様々な表情を見せながら発達支援につながるように関わっていきたいです。

『「この子」を世の光に』 あゆみ学園指定相談支援事業所

相談支援専門員 梶原 佳代

令和6年7月4日～5日、鳥取県米子市にて開催されました「中国・四国地区知的障害関係職員研究協議会」に参加させていただきました。1日目は中央情報報告と分科会。2日目は記念講演でした。岡山から米子に向かう電車トラブルにて、途中の駅で2時間程度足止めとなり、またその後運行再開となっても、普通列車のスビードでの運行であったため、結果中央情報報告は会場で聞くことはできなかったのですが、分科会は相談支援部会に参加させていただき、山口県・高知県・島根県の3名の方の発表と助言者含めての意見交換等にて、他県の相談支援体制や、まだ松山市には設置されていない、基幹相談支援センターの取り組み等を聞くことができ、とても勉強になりました。

2日目は、障害福祉の父と言われる、糸賀一雄氏が鳥取県出身ということで、鳥取短期大学國本教授より、糸賀一雄氏の故郷から考える福祉の思想についてお話いただきました。生前の映像等も交え、糸賀氏の当時の考え等を学ぶことができました。「この子」を世の光に」という言葉が有名ですが、他にもドイツ語の「ミットレーベン（共感）」という言葉も大切にされていました。支援には「ミットレーベン」が大切。頭で理解する「共感」ではなく、肌と肌が触れ合う・体温的な感覚・同じ温度のお風呂に入っている感覚と表現されており、「ともに暮らす」大切さを学ぶことができました。また、この子に障害のある子どもと理解されがちですが、糸賀氏は世の光になることを求めているのは、子どもだけでなく、それを日々ミットレーベンの中で支えている支援者のことでもあり、「この子」が「光輝いていくような」育て方や教育・支援をする専門職にも目を向け、「この子」とともに、その周囲の人物たちもまた

「世の光」として捉えていたことを知り、日々支援している我々の励みにもなる言葉だと感じました。今回の研修では、日々の業務とは少し離れ、電車トラブルの結果、特急列車ではあつという間に通り過ぎてしまう、岡山から米子へ向かう自然豊かな景色をゆっくり見ることができたり、研修では他の県の取り組みを知ることができたり、福祉の父といわれている糸賀一雄氏の当時の考え方や様々なことを学ぶことができ、私にとって、得るものが多い研修となりました。この研修で学んだこと感じたことを、またこれからの日々を活かしていきたいと思えます。これからも、困ったこと等があれば、気軽に声をかけてください。もちろん困ったことがなくてもお気軽に。そして逆に私が困っていたら助けてください。たくさんの方々との出会いを楽しみにしております。

『保護者支援とは』 小規模保育事業所ひかり

主任保育士 四元 晶子



子どもたちは、保育園での生活を経験する中で日々成長していきます。私たちは、子どもの健やかな成長をいつも願っていますが、今の時代、保育士には子どもの成長だけではなく、保護者支援という役割も求められています。子どもの成長は、保護者の方々との協力や信頼関係がなければ望めないもので、どちらも重要なことだと思っています。

保育園では毎日手書きの連絡ノートを利用して日々の様子を伝えていきます。保護者の方からは、子どもの様子だけでなく時には悩み相談のような事を書かれています。単なる連絡ノートではなく育児日記のようにもなっているのが大事なコミュニケーションの手段として丁寧に記入しています。

今在籍している子どもたちには兄弟のいる家庭が多いです。ちなみに職員も現在、第2子妊娠中です。安心して仕事や子育てができる環境として保育園がお役に立てているとすればこんなに嬉しいことはありません。これから皆様に愛される保育園を目指して職員一同、気持ちをひとつにして頑張っていきたいと思っています。



『実家のような保育園』 企業主導型保育事業所あゆみ保育園

保育士 豊田 尚子

ひかりと出会って三十三年。一度離れた時にはまだ「ひかり保育園」で先生の人数も半分ほどでした。今は「あゆみ保育園」になり、園舎も園庭も変わり書類も増えて、帰ってきた私には、浦島太郎のようです。でも大きい先生や小さい先生がいて、労を惜しまない先生たちが、元氣いっぱいの子どもたちと過ごす毎日は今も変わらず、居心地の良さは変わりません。もう一つのうれしいことは、卒園児がお父さんお母さんになって子どもたちを通わせていることでした。

七年間勤めてきた幼稚園を退職する時に「どうしてひかりに戻られるんですか？」と聞かれました。「私にとっては実家のようなところで心の拠り所なんです。」と答えましたが、ひかりで育った子どもたちにとって、そのような場所なのかなと思いました。家庭的というよりも、家族そのもののような繋がりをもった

この保育園で、これから、子どもたちが大きくなってまた戻って来られるような園になるためのお手伝いができたらと思います。

『「コロナ禍を経て今」』

多機能型事業所あゆみ 生活介護事業

生活支援員 大野 朋子

新型コロナは、2020年1月30日の発出より約3年3カ月「脅威は完全に消えたわけではない」と留保付きながら実質的な収束宣言を迎えた。

我が家の四男は、中学三年から高校二年の一番楽しめ満喫できる時期（人それぞれ違うと思いますが）をコロナ禍で過ごし、学校行事やサッカーの大会等ことごとく中止となり想定外の生活を余儀なくされ進路選択にも影響が出ました。そんな四男も今春から県外の大学に進学し、夢に向かって邁進しています。そして賑やかだった我が家は、子供が誰もいなくなり火が消えたようになりました。

感傷に浸っている間もなく、時を同じくして認知症を患う実母の介護が始まり、今までとは違った忙しい日々を送ることとなりました。昔から子供の手が離れると次は親と言われているように正に今直面しています。もつこれは50代の私に与えられた最後の試験だと思ひ、開き直って頑張ろうと思ひます。後何年生きられるだろうかわからない実母のためにも。

私の趣味は、息子達が出場するサッカーの試合観戦。たまにJリーグも観戦します。介護の合間を縫っては出かけ、広いグラウンドやスタジアムで大きな声をあげての応援は、ストレス発散の絶好の場にもなっていました。もちろんコロナ禍ではそれも中止になり、悶々とする日々が続いていましたが・・・子供たちがいなくなった今、再びあの悶々とする日々に戻りしめてしまいました。ストレス発散の場を失い仕事と介護の両立に疲れ、このままではだめだと思ひ、主人と二人で半信半疑でウォーキングを始めました。中央公園周辺や公園

内を約一万歩を目安に歩き始めました。ご存じの方もいらつしやると思いますが、公園内をウォーキング中には、四季折々の景色を楽しめ季節を感じることもできると同時に、子供や学生、おそらく同年代であろう方々の運動する姿や声で、とても活気があり賑やかな雰囲気も味わえ、あたかも自分がその運動をしているかのような気分にもなれてしまつのは不思議です。また高校野球の時期には、坊っちゃんスタジアムから大応援が聞こえ、声につられて観に行つたこともありました。ようやく通常の暮らしに戻れたのだと嬉しく思います。

子供が幼い頃は、中央公園の空き地でサッカーの自主練をさせていました。その当時は警備員が配置されており「ここでボールを蹴らないで」と何度も注意をされた苦い経験思い出します。今の公園内は、その警備員の姿もなくコートやグラウンド内にとまらず、駐車場の空きスペースまで活用し、マラソンやスケボー、自転車、スポーツ以外にも楽器や応援練習をする人の姿も見られます。良くも悪くも様変わりした公園内を横目で見ながらウォーキングすることが、今では日課となり、私の新しい趣味となりました。そして体力作りにも一役かっています。

生活介護事業では、体力勝負の面もあり、実母の介護の傍ら県外の息子のサッカー観戦に行く楽しい目標（今は現地に行かなくてもYouTubeライブ配信と言う便利な物もあります）を新たに設け、趣味と実益（体力作り）を兼ねたウォーキングを続けていきたいと思っています。



『ルック・アット・ミー』

多機能型事業所あゆみ 就労継続支援B型事業

職業指導員 倉橋 明美

就労継続支援B型事業の職業指導員として4月に入職し、はや半年が過ぎました。多機能型事業所あゆみに入職するきっかけは、職安からの紹介ではありましたが、「社会福祉法人 あゆみ学園」の礎、日本キリスト教会との縁もありました。最初は中学生の頃、英語が好きで毎週日曜日の午後川上教会で Bible Class（英語の聖書を輪読して学ぶクラス）に通っていました。当時松山東雲学園と山越教会の牧師 Joe Gordon 先生が教えて下さり、松田牧師、郁枝奥様、愛大医学生と一緒に聖書を勉強していました。その縁で高1と高2の夏休みには「滑床英語キャンプ」に参加し、そこで宇和島のエレン・ア・ワン牧師や三好医師にお会いしました。それから幾星霜が過ぎ、娘が東雲中学へ入学した頃に再び川上教会のクリスマス

礼拝に参加したことがきっかけで、川上教会の信者様から誘われて讃美歌やルネッサンス、バロック期の宗教音楽を演奏する混声合唱団「東温ボーカルコンサート」に入団し、今も川上教会や近くの集会所などで練習しています。ちなみに社会福祉士/ソーシャルワーカーの資格を目指したのも、松田牧師が隣の特別養護老人ホームガリラヤ荘の相談員をされていたことが影響していたと思います。

「多機能型事業所あゆみ」に入職後は「ご利用者様と一緒に主に農作業を行ってまいりました。特に今年の猛暑の中では熱中症に気を付けて休憩をこまめに取りながら十分に水分補給を行い、辛い暑さで体調を崩される方はありませんでした。

あゆみのご利用者様と一緒に作業をさせていただく中でとても印象的だったのは、作業中

に不意に私が「あつー」と声を出してしまつと「倉橋さん、大丈夫？」と心配して下さるご利用者様がおられることです。他にも困っている人があったらお互いに声を掛け合つて助け合い、気になることがあったらすぐに支援員さんへ相談されておられます。困ったとき、困っている人を見かけたときにすぐ行動されているのです。私はついやせ我慢をして「大丈夫、大丈夫」と言つてしまつたのですが…そんな時、昨年8月に、松山市で精神保健福祉士会全国大会の市民公開講座に登壇されていた松山市出身の作家・天童荒太さんの言葉を思い出しました。困っているとき、きちんと『ルック・アット・ミー（私を見て、気づいて下さい）』と言える、お互いに伝え合つことが大切だと。毎日、ご利用者様との触れ合いから、多くの学びを頂いております。

当事業所の主要な農作物は何と言っても「苺、アイコトマト、イチジク」で、長年ご愛顧いただいている近隣事業所や住民の皆様、お得意様、そしてご利用者様ご父兄の皆様からお買い求め下さりありがとうございます。今年はその他にも「大根、スナッフエンドウ、キャベツ、オクラ、メークイン、シルクスイート、鳴門金時」等が豊作でした。「ローヤルトウモロコシ、落花生」は鳥や害虫対策が来年の課題です。また再び10月から苺の植え付けが始まり、11月になって青輪の苺の花が可憐に咲いています。

毎日支援者としてご利用者様が一生懸命に世話をしているても害虫に先取りされたり病気になるたりで、収穫までは長い道のりです。食べ物がお店に並んでいても今まで当たり前感じていましたが、様々な困難を潜り抜けてようやくお客さんの目に留まり、ようやく食卓に上がることができたんだな…としみじみ思います。野菜も人も「ルック・アット・ミー」と声に出さなくても、（私を見て、気づいて下さい）（あなたを見ていますよ、そばにいるよ）と、時に声で、時に心で、お互いに伝えたいと思います。



先生、保護者の皆様、いつもありがとうございます。あゆみ学園の役員をすることができ、貴重な経験をさせて頂きましてとても嬉しく思います。今年度、初めてとなるお茶会を開催することができ、保護者同士親睦を深めることができたかなと思います。実は今年度の役員は、皆昨年度同じクラスでとても仲が良く、和気あいあいと楽しく活動することができました。子供達の明るい園生活のために、役員一同手を取り合つて頑張ります。後期もよろしくお願い致します。

- ◎ 会長 西村 美登里
◎ 副会長 三野 志穂
◎ 会計 田邊 その
◎ 書記 西本 真理

あゆみ学園 父母の会 役員紹介



中央競馬馬主社会福祉財団 様の
ご助成を頂き、多機能型事業所あゆみに新しい送迎車が配備されました。安全で快適な送迎ができるようになり、利用者の皆さん大変喜んでおります。
本当にありがとうございました。

多機能型事業所あゆみ 家族会 役員紹介

- ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
◎ 会長 奥 裕子
◎ 副会長 角田 三記子
◎ 監事 橋本 順子
◎ 監事 梅岡 典子
◎ 監事 本田 佳子

ここ数年、新型コロナの影響で思うような活動がなかなかできず、事業所内での活動でした。今年は、7月に「夏祭り」があり、まだ、大人数での参加は無理なので、家族会の役員のみが、お手伝いと言つて参加させて頂きました。子ども達の笑顔が見られて、嬉しく思いました。これからも、子ども達の笑顔を絶やさないような活動ができることを願っています。

お知らせ

- 令和5年度の苦情受付に關して各事業とも受付件数0件。処理件数0件でした。
- 決算書類や事業案内は、当法人ホームページに掲載しております。



〒790-0047 松山市余戸南6丁目6番9号

社会福祉法人あゆみ学園



児童発達支援センターあゆみ学園
児童発達支援事業どんぐり
ayumi-g@bz01.plala.or.jp
HP Tel 089-972-0999 Fax 089-972-3511

〒790-0047 松山市余戸南6丁目3番26号

多機能型事業所あゆみ

生活介護事業所あゆみ
就労継続支援B型事業所あゆみ
あゆみ学園指定相談支援事業所
ayumi-s@ksn.biglobe.ne.jp
Tel 089-974-5141 Fax 089-907-6100

〒790-0912 松山市畑寺町843番地1号

多機能保育事業所あゆみ

小規模保育事業所ひかり
企業主導型保育事業所あゆみ保育園
Tel 089-948-4402 Fax 089-977-4412